

事實疑ふ餘地はあるのです。一切は未だ不明です。暗憚たる雲にとざされてゐます。その雲を見てゐる丈で私は頭が痛み、心は絶望的に暗くなります。而も私は一方その重苦しい雲を有り難く思つてゐるのです。私はそれが破れてもつと怖ろしい裏の正體が現はれる事を怖れてゐます。私を空息させる雲よ、どうかずらぬてくれ、と私の心は云つてゐます。

併し私は眞實を誤魔化さうとは思ひません。私は假令本當の事でも、避けられる可厭な事は避け度い。併しどうせ誤魔化し得ない事、避けられない事を私は避けやうとは思ひません。私は臆病者ですが、卑怯者ではありません。むしろそれがもつとはつきりして確かなものとなつたら私はこんなに茫然として滅入つて許りはゐないでせう。そして斷乎たる態度に出るでせう。けれども、——私には事實未だそれを信じる事は出来ないのです。有り得べからざる事のやうにしか思はれないのです。而もその癖私は堪へ難く心を暗くされてゐます。

——様。私な一體何の事を書いてゐるのか。私は性急な、察しの速い貴方の「頭の休養」に大事な時間をくたくしい餘計な事や、冗漫な文句によつて奪ふ事を怖れます。否、それ以上に私は貴方が讀むに堪へない、面倒臭い他事として此手紙を餘りに早く投げ捨て、了はれる事を怖れてゐます。私は貴方の興味をそがない爲めに出来る丈け簡潔に速く要事を認めなければなりません。

勿論お厭ならお捨てになつて下さい。私の書く事は怖ろしい事です。それは餘りに昔からありふれた事であり乍ら、材料に窮してゐる何干と云ふ小説家さへ一寸材料にする事を憚る、奇抜な醉々な材料を選んだと人に思はれる事を怖れる爲めに書かうとはしない事なのです。それで私もついそれを書き鈍つて、こんなくたくしい長い前置きを書いて了ひました。お許し下さい。

手つ取り早く思ひ切つて書くと、最早御推察の通り、私は或る娘を戀し、そして私の苦しみは報いられたのでした。私は昨年正月當地での音楽會で始めて、乙と云ふ私の知人の妹と一緒にゐた彼女を見、次に——それは丁度賑やかな花時の事でしたが——思ひがけなくも都踊で彼女に逢ひました。其時彼女は叔母さんや、その子達と來てゐましたが、普通席なので、殺倒して入り來る客の浪に押されもまれて、高い花道から何遍も突き落されさうになり、悲鳴を上げも得ずに叔母や小さい従妹達と手をつないだなり、ムキになつて我ん張つてゐたのを私は遠くから見てヤキモキしたものでした。何だか質のわるい男達が態と群集の動搖を利用して彼女に悪戯をしてゐるやうな氣がして腹が立ちました。とに角その時から私は戀に落ちたのです。

併し私が本當に自分の戀をはつきり自覺して、惱み始めたのはそれから一ヶ月後の事で、それ迄はそれを戀だと自ら認める事を私は自分に許さなかつたのです。或る日乙の處で、二三人の打ちと



げたわりに親しい仲間が私と一緒に落ち合つた時、——Zは私の舊い同窓の先輩で、もう細君のあつた人、人の好い気さくな男でした——其處にゐた可愛らしいOと云ふ友達がそのラヴの事で皆から揶揄はれました。で、私も一緒にその厚意のある青年をからかつたのです。

「人が知らずにはゐると思つて、君は自分の事を棚に上げてゐるね。」可愛いOはムキになつて私にかう云ひました。

「さうさ。Kには秘密があるんだ。俺はちやんと知つてゐる。」

Zがいかにも知つたやうにかう云ひました。

「何を云つてゐるんだ。」と私は腹の中でをかしく思ひ乍らわざとかう云つて見ました。

「それは無論あるさ。併し氣の毒ながら君達は知るまい。」

「まあKさんも隅には置けないのね。あんなとぼけた顔をしてゐて。」

とZの細君はほゝ笑むで云ひました。

「嘘ぢやない。俺はちやんと知つてゐるんだ。」

Zがいやに眞面目くさつて又かうくり返したのに私はふつと釣り込まれました。で、

「うむ。君は知つてゐるね。」

と私がうつかり口走つて了つたから大變です。

「お！これは驚いた！」皆はかう云つて顔を見合せてワツと騒ぎ始めました。

「そうら、白状したぞ。引つかゝつた！引つかかつた！面白い！面白い！」

Zも意外であつたやうに「ホッホ！」と笑ひました。

私は子供らしくあわてゝ打ち消しましたが、そんな手遅れな事をすればする程いけへくなる事は分りきつた事でした。

が、實を云ふと、私が其處迄子供らしくZに秘密を握らせたと云ふ事には或る意識があつたのでした。私はうつかり口を迂らしたやうにして此事件に或る發展を促さう、即ち彼女がZの妹の友達であると云ふ手づるを此氣輕な、併し人の好いZ夫婦に利用して貰はう。と云ふ氣が私にはあつたのです。つまり私は幼稚な間抜けを裝ひ乍ら狡るい事をたくらむたのです。勿論、そこ迄私ははつきり意識的に芝居をしたのではないので、むしろ本能的にふと其場の芝居をして了つたのです。

そして不思議にも私は本能的にそんな芝居をして私の矇朧としてゐた秘密を仲間に宣言するが否や、そして皆から私の戀を承認されて、揶揄はれるが否や、私の戀は急に猛然として發展し始め、最早誤魔化す事の出來ない、否定し難い、はつきりしたものになつたのでした。何の事はない、私



は人に宣言する事に依つて自分に宣言したのです。

其時から私の心持ちは全くそれ迄とは別なものになつて了りました。

察しのいゝZの細君に依つて私の本尊は容易に分つて了りました。そして私の目論見は豫定通りに發展し始めました。

Zは郊外に苺畑を持つてゐました。五月の末の或る日曜私はZに其處へ苺を食べに行く事を誘はれました。勿論其處には彼の妹が「彼女」を連れて来る事になつてゐたのです。——が、甘い話を書く事は此手紙の主意ではないから省きませう。要するに苦悶と幸福との混合した日は間もなく去つて、混り氣のない喜びの日が私には來たのです。私の望みは達し、彼女は私を愛してくれました。私は兩親の許しを得、此秋か、來春彼女が女學校を卒業するのを待つて結婚する事に迄話は進んでゐたのです。

彼女は和歌山の或る大きい農家の娘で、大阪の叔母の家に寄寓し、現に其處の有名な某女學校に通つてゐるのです。

幸福な一年間。一日おき位には彼女に逢へる。友達からは祝される。前途は希望と光明に充ちてゐる。去年の夏は彼女の叔母の一家が明石に避暑に往つてゐた間、八つになる小さい女の子を一人

連れて私達は美しい瀬戸内海を航し、小豆島や、屋島にも行きました。彼女は甲板の欄干に掴まり、小さい手を額にかさして、前を見、後ろを見、又柔かい疊のやうな青い水面を切つて行く舷側に戯れる美しい水を見、満面に喜びの笑を浮かべながら、と角私達の話を邪魔して、あれは何處だ、之は何だ、としつこくいろいろの事を訊ねる小さい従妹に手こずつて、知つた振りの間違つた説明をしたりして笑つたものでした。そして私達が時々邪魔にする此小さい佛の頬ぺたを、その無遠慮を邪魔が又可笑しくつて、彼女が接吻した直ぐ其跡を私が接吻したりした事もありました。あゝ、私の生命を輝かし、一生を明るくした此一年の幸福の爲めには此海水の中に飛び込んでも惜しくない、と私は其時思つたものでした。

そしてそんな時には彼女の叔母が、彼女の親——彼女にはもう母親はゐないのですが——への斷りもなく、未だ結納も取り交はしてない私達二人をいとも無造作にこんな旅行へ出したりする氣輕さを、昔の人にも似合はない事と思つて却つて私が訝つた事などは全て忘れてゐたのでした。私はむしろそんな事は一も二もなく反對される事と思つてゐたのに。叔母は始めから私との縁談を喜んで、彼女の父にもあつせんしてくれました。恐らく私の家がわりに名家でもあり、多少の資産もある爲めであらう、と私は思つてゐたので、勿論其事はもつげの幸ひとしか、思はれなかつたので



す。

然るに、何と云ふ事でせう。或る日私は突然、普段滅多に手紙も寄来さない父から「親展」の手紙を受けとつたのです。——何と云ふ事なしに其時私は胸が恐ろしくドキツとした事を覚えてゐますが、——それに依ると、思ひがけない事を聞いた。彼女の血統は正しくないらしい。もし其事が誤りないとすればお前にとつて如何にも辛い事ではあらうが、此縁談は諦めてもらふよりない。未だはつきりした事は分らないが、萬一さう云ふ事になつた場合、突然お前にその事を知らせてお前に急激な大打撃を與へる事を怖れるので、豫め今から此事を傳へておく。今となつてこんな事をお前に書く事は自分にとつても残念な事であるが。——と云ふのです。

晴天にヘキレキがあると云ふ事には私達は苦情は云ひません。本當に幸福と云ふものを願ふ者は晴天の下でもヘキレキに備へてゐなくてはなりません。併しかう云ふヘキレキを、こんな方面からのヘキレキを誰が豫想する者があるでせう。吾々は海上にゐる時暴風雨や、濃霧や、暗礁の到来を豫想する事は出来ず。併し地震や洪水の災難を誰が豫想するでせう。花園の中に吾々がゐる時、吾々はどんないやらしい蛇がその美しい花陰から現はれるかも知れないと云ふ事を豫想する事は出来ず。併し其美しい花自身が急に醜い妖怪に變化しやうとは誰が豫想し得るでせう。

私には父の手紙は何の事だか、さつぱり譯が分りませんでした。血統が正しくないとはい體何の事か。彼女の家は穢多でもあるのか。——そんな事はない。たとへ萬一そんな事があつたにしろそれが何だ。

穢多。——確かに穢多は多い。だが彼女は天使である。自分は彼女を戀人とし、未來の妻として持つてゐる事を名譽としてゐる者だ。自分は彼女を尊敬してゐる。彼女の内に神がある事を信じてゐる。自分は又彼女に愛されてゐると云ふ光榮に浴してゐる。彼女は神聖である。

私は始めには呆然とし、次には腹が立つて來ました。自分の受けた冒瀆に對して。私は蒼田命にゐる父の處に行きました。

「學校を休んで來たのか。」父は云ひました。

「學校などはどうでもいゝ。」私は腹の中で「馬鹿！」と呟き乍らかう答へました。そして父とは話さずに母と話しました。

「一體血統が正しくないとは何の事なんです」私は訊きました。

「體の事よ。」神経質な母はおづ／＼して心配し乍らかう云ひました。

「體の事と云ふと——つまり肺病のすちとでも云ふのですか。尤もそんな事を云へば自家には随



分その系統はあるのだから人の事は云へないが——」

いゝえ、それぢやないのよ。——尤もね、普通系統が正しくないと云へば、肺病のすぢの事も中に入れて云ふ時もあるし、入れない時もあるし、その土地の習慣などでいろいろに違ふやうだけれど……

◎「その他にはどんなのがあるのです。——」

私はふとかう訊き乍ら、ソツとしました。或る事を考へて。併し、それを云ふ事は怖ろしかつたので黙つて了ひました。

「その他には氣違ひの系統、つまり精神病の系統なんと云ふものもあるし——」母はかう云つて苦し相に顔を赭らめて云ひよとみました。

「それから癲癇や、癌の系統なども入るでせう。——尤も癌の系統などを入れたらその中に入らない者はまあ無くなつて了ふでせうが。——」

「あゝ。つまり、どんな怖ろしい病氣でも傳染性のないものなら、つまり、人のさう忌み嫌はない病氣ならね……」

「尤も人の好く病氣つてもものはないでせうが。」

私は態と怖ろしい話をし度くないので、こんな事を云つて薄笑ひをしてお茶をにこしました。母も怖ろしい事を云ひたくないので、それ以上餘り露骨には云ひたがりませんでした。

私はそれを幸ひに其處をにげて人のゐない二階の室に行き、深い溜息を吐き、歩き廻る勇氣もなくぼんやり窓縁に腰を卸し、それから少し減入る氣分を變へて英氣を養はうと思つて裏の畑へ出ました。

其處には丁度、苺が赤くなつてゐました。あゝ五月の末。丁度一年前のZの畑を私は思ひ出してたまらなくなりました。

私には母との會話によつて父母の意味する所謂「系統が正しくないと云ふ意味が分りました。それは肉體上の事であつて、而も肺病ではなく、精神病でもなく、癲癇でも、癌でもなく、怖ろしい傳染病で、最も人の忌み嫌ふ病氣。考へる丈でも慄然とする、人が餘りに口に出す事をも憚る、世にも醜惡な、何人も顔を背ける病氣。餘りにそれが呪はれた感じである爲めに人に宿命を想はせ、前世の惡業に對する天刑であるとの迷信をさへ起させ、基督に奇蹟を行はせた病氣。

然して、その系統を彼女が引いてゐる。私の文字通りに天使であり、清淨と、高潔と、神聖と、あらゆる美德との權化である彼女が、その系統を引いてゐる。



實際的に考へれば些しも有り得ない事ではない事。而も餘りに奇怪な、餘りに意外な、餘りに奇抜な事。もし之が小説であつたら批評家はキツと私の思ひつきをケナすでせう。そして私がどんなに眞實な心持ちでそれを書いて、只それを單なる「奇抜な思ひつき」として了ふでせう。

全く、それを私に信じられる譯はありません。馬鹿々々しいやうな事です。私はかう云ふ斷定を下しました。之は無論嘘だ、恐らく彼女の家に、彼女の父に反感のある競争者が中傷的に爲た悪討であらう。否しからずれば、私は大學でも出て、自活出来るやうになつてからもつと山緒ある確乎した財産や、地位等のある良家から嫁を取らせようと望むでゐる父の計らひであらう。父母は始めにはまあ承諾をしたものの段段考へてゐる中に人からもいろいろいゝ話を聞かされそんな風に氣が變つたのであらう。そして他人の運命や、名譽や、幸福に深くは頓着しない父がこんな醜惡な窮した手段を取つたのであらう。と。

私は何と云ふ事なしにさう云ふ事に定めて又家に戻り、そして彼女に手紙を書きました。只一寸家に遊びに來た。裏の畑で苺を見て一年前の事を思ひ出した。と云ふやうな事を書いたのです。そして私はこの封筒を態と父母の來る茶の間を茶ブ臺の上に放りました。父はそれを見て、苦笑し、母はそれを見て眉間に八の字を寄せました。

「聞いたか。」父は其時急に私にかう口を切りました。

「えゝ。しかし一體どこからそんな事を聞いたのです。知は訊き返しました。」

「和歌山の者から聞いたのだ。どうせ縁を結ぶとなれや先方の家の素性や萬端は一應檢べなくちやならない。勿論そんな氣で檢べさせたのぢや些つともなかつたが、全く心外な事だ。俺達もどうしたものかと思つて當惑してゐるんだ。それでとりあへずお前にもあゝ云つてやつた譯だが——」

「しかし、そんな事を傳へた者は信用のおける確かな人間なんですか」私はつい、噴嘩腰になつてかう云ひました。

「それはもう信用のおける人なのよ。」と母が横から云ひました。「古くからの懇意な人でもあるし……」

「まあさうプリプリ口を利いたつて話は出來ないが。俺達は何もお前の縁談を裂かう杯と思つたのぢやない事は俺達が承諾した事でお前にも分つてゐるだらう。勿論こんな事を輕卒に口外出来る事ぢやない。先方一家の名譽にも關はる事だ。だから俺は改めて最近にもう一人確かな男を遣つて檢べさせたのだ。其人達は先方の家には何の關係もない此土地の人なのだから間違つた情實に支配されて嘘を云ふ氣遣ひはない。だ。俺も始めて聞いた時はどうかと疑つてゐたが、かうして二度迄も



同じ事を聞いて見ると……」

「本當に困つた事になつてねえ。妾達はまあ良き相な縁だと思つて喜んで、一安心してゐたのに、こんな飛んでもない話になつて……」

母も溜息を吐き乍ら云ひました。

「一體向うの家で始めから此話に乗り氣のし方がどうも少し變だとは俺も思つたのだ。さう思つて見ると結納の急ぎ方や、俺に寄來した向うの阿父さんの手紙の書き方なども餘りに飛びつくやうな書き方なんでをかしく思つた事もある。」

それに又少し疑ひ深い眼で見れば、その娘が大阪の學校に入つてゐると云ふのもいくらか變なやうでもある。しかしまあ、之丈けできつぱり定めて了ふのも何だから俺はまあ念の爲めにもう一度向うの土地の醫者にでも、——つまり向うの家で始終かゝりつけてゐる醫者にでも秘密に聞いて見やうかとも思つてはゐる。念の爲めにだ。秘密探偵と云ふ者も考へちやゐるが。餘りいろいろやるのも面白い事ぢやないがな。」

そして父は最後に一段語調を變へて宣告的にかう云ひました。

「もしもさうして檢べて見た上で愈々確かにさうと云ふ事になつたら——之はどうもお前には實

につらからうが、諦める事にするよりないな。どうも致し方のない不運としてだ。結婚と云ふものはその當人同士丈けのものぢやなく、子孫に深い關係のあるものだからな。自分の幸福の外に、多數の子孫と云ふものゝ幸福も考へなくちやならぬし。それに又社會に對しても……」

「本當に他の事ならまあどうにでも話はつくし、妾達も異存はないのだけれど、どうも之ばかりはね。本當にお前には何とも氣の毒で仕方がないけれど、さう云ふ不幸な人によつたのが竟りお前の運がわるかつたのだと思つて……」母もかう云ひました。

「しかし……」私は父母の言葉を遮切つて云ひました。「誰が果して本當に正しく他人の血統の事を云々する資格を持つてゐるでせう。僕らの遠い先祖にどうして必ずさう云ふ者がなかつたと云ひきれでせう。或はそれよりもつとつと恥づかしい、忌むべき、怖ろしい病人の血を必ず僕らが引いてゐないとどうして云ひきれでせう。僕らは只自分と人とがそれを今幸ひに知らずにあると云ふ丈けであるかも知れない。先づ自家の血統を檢べませう。他人の血統を嚴酷に檢べる前に自分の血統を嚴重に檢べやうぢやありませんか。」

「ふむ。檢べるがよい。」父は苦笑して云ひました。「お前の云ふ事も尤もぢやある。本當にそんな事を知つてゐるのは神様許りだでな。人間にや分らない。だが人間に檢べられる範圍内ぢや人間の



檢べた事を信用するより仕方がないぢや。俺達は人間なんだからな。そしてお互ひに自他の不幸は避けなくちやならないのだからな。空な理窟を云つたつて仕方がない。お前はそんな事を云ふがな。お前が自分で子供を持つて見れやその子をさう云ふ血統の處にやる氣はしなくなるよ。勿論それを知らずにやるのなら又別だがな。知つた以上、一人の希望で其一族の子孫代々の者の幸福を殺して了ふやうな結婚には親として何處迄も反對するのが義務だからな。——お前の氣持ちは察してはゐる。之は容易な事で思ひきれる事ぢやない。だがよく實際の事を考へて見てくれ。俺達をお前の敵と思つてくれちや罰が當るぞ。可哀相に阿母さんは此事の爲に三晩と云ふものは全で夜明かしをしてゐるのだ。短氣な、燃え易いお前が又自暴を起して、もしやどんな怖ろしい事でもし出かしはしないかと思つて、飯も碌に食へない程弱い胸を痛めてゐるんだ。」

父は少し私に對する豫防線を張る氣味でかう云ひました。ふと見ると母の眼には涙がありました。と、私も急に胸が破れるやうな氣持ちになり、二階へ逃げて行つて泣きました。

「どうか、自暴を起さないでくれね。妾を可哀相だと思つて。本當に妾も此事でどんなに苦しんでゐるか知れないのだから。」母は後から上つて來て又かう云ひました。

此母の女らしいエゴイステックな言葉に私は些か勇氣を得て云ひました。

「大丈夫ですよ。僕は自暴を起すやうな馬鹿ぢやないつもりですから。併し僕は自分自身で此事を檢べて見ます。あらゆる手段に訴へても本當の事を檢べるでせう。只、しかし、此事だけは云つておきますよ。僕はどんな事があつてもあれと別れはしないと云ふ事を。——もしあの事が果して本當なら、僕らは子供は作らないでせう。斷じて作りません。そして事によつたら僕らは山の奥へでも引つ込むでせう。そして僕は淋しく、勉強し乍ら一生暮すでせう。しかしあれと二人です。」

「そんな——そんな事を云つてもやつ張り子供は出来るからね。」

かう云つた時母の眼は異様に光りました。それは明かに「もしや事によつたらもう既に子供が出來かかつてゐるのではないか。」と云ふ懸念が彼女に浮んで來たからでした。

「大丈夫です。しかしさう思つてゐて下さい。僕の決心は變りませんから。」

私はその晩はとも角も自家に泊つて翌朝歸るやうにとすゝめる母の言葉に返答もせず、只かう云ひ放つて、絶望する彼女を後に残し乍ら、そして病身な、五十八になる彼女の苦しみの爲に泣き乍ら其晩又京都の家へ歸つて來たのでした。事によつたらもう自家とは、父母とは絶縁して了ふ悲愴な覺悟を抱きながら。自分の偶像を穢された腹の立つのも通り越して、深淵の中に沈むやうな絶望の間に心をとさされながら。泣きも得ず、叫びも得ずに、ぼんやりとして。



一週間を私はかゝる寂寞とした闇の中に過しました。私は輝かしい初夏の白晝に出て日光を見ず、うららかな空を仰いで青空を見ず、友がなつかしいくせに友に逢ふのも厭でした。人と口を利く氣になれず、全で笑ふと云ふ事を忘れたかのやうに笑はなくなつて了ひました。痛を宣告された患者のやうに。時々おつき合ひに強ひて笑ふやうな表情をしてもそれは強も出ない一層にがにがしい自分乍らいやなものでした。一度彼女を訪ねましたが彼女は郷里へ用があつて歸つた留守で逢へず、音信も來ませんでした。只博物館へ行く事と、嵯峨や、御室や、比叡山や、黒谷、眞如堂あたりを今日は何處、明日は何處、明後日は何の方面へと、時間割のやうなものを作つて見て、わざとそれに従つて規則的に散歩に出掛ける事などで空虚な日をまぎらし過しました。

私は父母が嘘を吐いてゐるのではない事を信じてゐます。よし父母の云ふ事が間違ひであつたにしろ父母は此場合偽つてゐる譯ではない事を信じてゐます。之は嚴肅な問題です。人間にとつての運命的な問題です。誰かの不正や、悪意によつて醸された問題ではありません。そんなものなら私は樂に打ち克てるのです。併し此絶對的な運命の問題の前で私は何者をも責める事は出來ず、何者へも抵抗しやうがありません。むしろ父母は彼等としてはわりに此事件に同情や、好意さへ持つてゐると私には思はれるのです。父母のみならず誰も此事件に反對を唱へる者はないのです。私は實

に易々と此處迄話をすゝめて來た。而も、父母の言に依れば、その「易々さ」が却つて氣味の悪いものであつた。運命の「反對」であつた、とは。何と云ふ意地の悪い、惡辣な、殘虐な、呪はしい皮肉でせう。

私は自分自身で此事の真相を検べると母に云ひました。何によつて検べるか。祕密探偵に頼むか。併しそれは何と云ふ不愉快な事です。天使の神聖な巢を狼に檢べさせるとは。併しこんな事も考へます。探偵に檢べさせて見てもしいゝ結果が上つたらそれを公然と持ち出す。悪い結果が上つたら私の手中に握りつおせばよい。どうせそんなものはアテにならないのだから。

只私は怖れる。うつかり私が突つついて彼女に自分の呪ふべき祕密を知らせて了ふやうな事が萬一ある場合を。かりにもし彼女の一族の上にさう云ふ呪咀の雲の一端が被ひかかゝつてゐたとしても、彼女は、かの天使は、全くそれを知らずにゐるのです。彼女がもしそれを知つてゐたら、——おゝ、何たる怖るべき事だ——彼女はどうしてあの如く明るく輝いてゐる事があり得やう。良夜の満月のやうに澄んでゐる事が出來やう。どうしてあんなに清らかな顔に、純粹なほゝ笑みを湛へてゐる事が出來やう。

それも彼女がもしも、彼女の反對に、己が運命に對する自暴自棄に身を持ちくづしてすさみ果て



た。芝居の出来る妖婦でもあると云ふならです。

が、そんな事を考へる丈けでも私には許せない罪です。私は盲目ではない。戀に落ちてからはいくらか盲目になつたかも知れないが、戀に落ちる前には私ははつきり眼があいてゐたのです。私は繰り返して云ひます。彼女の中に神がある事を、私は信じてゐると。彼女の美は無限である。併しその最も崇高なるものは彼女の内なる神から發射されてゐるのだ。

そして又私には此事が變に思はれる。彼女のやうに敏感な人間が、物をごまかす事の出来ない人間がどうしてそれを今迄知らずに來たのか。もし彼女の一家にそんな血統があると云ふ噂があるものなら。一の事實は三か五の噂を生む。殊にそれが悪い事實である場合には。故にもしさう云ふ事實が果してあるものならそれはきつと大袈裟な風説となつてゐなくてはならない。一つの町にさう云ふ風説があるとす。町の子達はきつとそれを耳にする。小學校では不幸な運命の子に對して他の子がきつと何か云ふものだ。「お前の家は何だ。かんだ」と。然るに彼女はそれを聞いた事がないのだ。もしそれを聞いたとすれば、それは彼女に大きな感銘を與へたにちがひない。そして必ずや其性質に暗い影響を及ぼさずにはゐなかつたにちがひない。のみならず彼女には五人の兄妹がゐる。一人の子がたとへその風説を親から否定されても五人の兄妹で聞いた噂の合計は親の否定も中々及

ばなくなるものだ。包みきれなくなるものだ。然るにそんな事はなかつた。そして今日迄さうとさうして來た。

私は去年の秋二三日和歌山に、彼女の家には秘密で、彼女に逢ひに行つてゐた事もあるが、彼女の家は公然と、世間と交際してゐた事は思ひ出せます。之等の事は私には不思議です。

父は意味あり氣に云ひました。「その娘は大阪の學校に行つてゐるのだね。」と。和歌山にだつて女學校はあるのにと云ふ意味です。しかし和歌山にはさう良い學校はないのです。もつと遠方から大阪に通つてゐる女學生はいくらもあるのです。

要するにそれは未だ疑はしいのです。

彼女にもしさう云ふ大不幸があり、そして彼女がそれを知つてゐたならば、——私はくり返しますが、もしそんな大不幸があるなら彼女は今迄、二十になる迄それを全て氣づかずには來られなかつたであらう。と。——彼女は決して音樂會や、芝居のやうな華やかな場所へ出て私に逢ふやうな事もなかつたであらう。そして私からも戀を打ちあけられたとしてもそれに應ずるやうな事は斷然しなかつたであらう。それは彼女の性質に依つて。と。

私は夢を見てゐるのだ。お坊つちゃん私の私はお人好しで、すっかり彼女にだまかされてゐるのだ。



眼をくらまされてゐるのだ。——鬼はかう云つて笑ふかも知れませんが、私は笑はせておく丈けです。

何と云つても私は彼女を信じてゐます。そして全生命を持つて愛してゐます。

併し私は昨日Zに逢ひました。Zが眞面目にいろ／＼訊いてくれるので、私はつゝみきれずとうとう私の悩みを打ちあけて了ひました。

Zは笑つてそれを否定して、尙ほかう云ふ事を云ひました。Zの遠い親類にひどい徹毒で死んだ男があつた。それは見るにも堪へない程醜い姿となつてゐた。そしてその息子も亦親の遺傳で同じやうな惨憺たる醜い死に状をした。その爲めに世間から癩病と云ふ噂を立てられ、彼の或る叔母はその間違つた風説に祟られて長い事結婚が出来なかつた。後で數人の醫者の言明によつてその誤解は解かれたが、さう云ふ間違ひもどうかするとある。事によつたらそんな事かも知れない。と。

私はその話によつて少し元氣になりました。

しかし私はともすれば暗い氣持ちになり勝ちです。自然は何と云ふひどい病氣を作つたものかと思ひます。どうかして早く此病氣を、人間として此世に生れながら人間の仲間に入る事も禁じられるやうな此呪はれた病氣を治すやうな工風は出来ないものかと思ひます。吾々が此呪ひから免れて

ゐると云ふ事は何と云ふ頼りない偶然であらう、自分がもしその病人であつたら？ 私の人生觀はどんな怖ろしいものとなつたであらう。私の一生はどんな呪はしいものとなつたであらう。想像する丈けでも堪らない事です。私は科學が、殊に何にも増して醫學が進歩して呉れる事を神に願はずにはゐられません。

病氣と云ふものが存在する事、殊に或る種の病禍が存在すると云ふ事に 僕等は苦情は云へません。何故なら人間は精神的に缺陷がある限りは自らそれを招くのですから。自業自得と云ふ事は當然な事でせう。しかし或る病氣は、自業自得とは何の関係もない只運命の呪ひによつて生ずる病氣。そして凡そ人から爪はじきにされる人間の生き甲斐を全く奪はれる事がむしろ當然な病氣。さう云ふ病氣からどうかして人間を救つてやり度いものです。

いろんな事を長々と書きました。私は只貴方にこんな面白くもない長手紙を読んで頂きながら只暗い印象を與へる事しか出来なかつた事を心苦しく思ひます。併し私は今貴方の事を想つてゐます。私は堪へ難く淋しいのです。どうか許して下さい。

第 二 信

——様。御親切なお手紙によつて私は勇氣づけられました。よくお忙しい所をあんな長い手紙を



読んで下さった事丈で、私は感謝してゐるのになほいろいろ御心配下さつて私は涙ぐみました。彼女が郷里へ歸つたのは、彼女の家からの結納沙汰を私の家で断つたからだったので。勿論断つたと云つても露骨に断つた譯ではないので、只もう少し待つてくれと云つたのですが、その云ひ方に彼女の家の方で疑ひと、不快を抱いたのだと思はれます。それで果して私の家の方で此縁談を承諾してゐるのかどうかを確める爲めに彼女をも相談に呼んだのです。

所が、怖ろしい事は起つて來たのです。それは思ひもよらない處から彼女白身が私の家での逡巡の理由を知つたと云ふ事なのです。

大阪に、彼女の叔母の家の近くに或る少年がゐました。それが毎日のやうに彼女の通學の途中で彼女を見、最も下等な方法によつて彼女に懸想をしたのです。それは私が彼女を始めて見たよりもずつと前からの事でした。彼女はその不良少年がいやで堪らなかつたのです。私と彼女とがかう云ふ事になつた事を其少年がどう思つたかは明かです。其少年は、その仲間との悪魔的な活動によつて實に驚く程私達の事をいろいろ嘆き出して檢べたのです。その少年は彼女の處に——巧みにも女のやうな字で變名の手紙を送つたのです。そして書き出しには私達の結婚を祝し、次ぎに

は何故私達は早く結婚をしないのかと書き最、後に、彼女の家の血統問題を書いたのです。

「——妾はもちろんこんな取るに足らない一不良少年の悪戯を、無頼漢の下等な復讐のしわざを取り上げはしません。」——彼女は手紙にかう云つて來ました。「——まつたく復讐です。只の馬鹿々々しい腹癒せに過ぎないと云ふ事は見えすいてゐますわ。貴方は妾がこんな事を貴方に書いて送る丈でも『馬鹿な!』と云つてお怒りになるでせう。妾だつて勿論何とも思つてなぞおはしません。それでも妾はうまくその悪戯つ兒の手にかゝつて其手紙を読む丈には讀ませられて了つたのです。何と云ふ馬鹿々々しい事。けれどいくら馬鹿々々しいからつて讀めば不愉快です。妾達は昔の人のやうに家の方位などを信じはしませんけれど、それでも聞かされれば矢張り強ひて凶ひ方位とされてゐる方へ移る氣はしないのと同じ事ですわ。馬鹿々々しいそら事だと云ふ事が分つてゐ乍ら矢張り聞けば氣持ちがわるい事だから不愉快なのですわ。——様。どうぞ妾の此不安といやな氣持ちとを貴方のお力でおひ拂つて下さい。何だか妾は未だ落ちつけません。妾達の運命にすつかり安心しきつて住む事が出来ません。」

貴方のお家の方で、結納を延ばすと被抑る事も、何でもない事とは思ひ乍ら矢張り氣になります。どうぞお笑ひになつて下さい。妾は貴方が笑つてさへゐて下されば安心なのです。妾はつい娘



らしい臆病な不安に囚はれる時貴方の『馬鹿な』と云ふ笑ひ顔を想ひ出します。さうすると妾は一人で急にここにきて来て小鳥のやうに勇み立つて來ます。そして本當に自分を馬鹿だと思ひます。そして幸福だと思ひます。

あゝ、妾は此二十日許りと云ふもの貴方のあの力強い笑顔に接しません。そして妾は時々馬鹿な凶い夢に襲はれます。貴方のお家からだしぬけに破談の書狀が來た夢などを。そして夢の中で直ぐ「あゝ之は悪夢だ。だまかされまい」と思ひます。

でも、妾は安心してゐますわ。貴方は妾を愛してゐて下さる。妾は信じてゐます。信じてゐます。妾達は幸福になるのです。今だつても幸福です。誰よりもく。そして此秋には、あゝ妾は親鳥の群と一緒に遠い移住に飛び立つ雛のやうに勇み立つてゐます。それなのにあゝ、妾はどうして此頃こんなに氣が沈むのでせう。體のせむでせうか。——様。どうぞ、笑つて下さい。毎ものやうに聲高く。そして妾を叱つて下さい。馬鹿!と。——」

かう云ふ手紙に私は何と答へたらいいのか。

云ふ迄もなく、私は彼女と一緒にいる。遅くとも來年の春には。

私は呪ふ。彼女の家の血統なぞと云ふ事を私の家で調べ出した事を。何と云ふ下らない、いやな

事をしてつたものか。私は願ふ。どうか何でもよい、此儘にそつとしておいてくれと。私はもう何も知り度くはない。調べたくはない。聞き度くはない。只彼女と一日も早く一緒になつて了ふ事。私達二人が、たとへどんな宿命であれ、二人きりが一緒にになり、幸福になると云ふ事は何の差し支へもない事ではないか。

だが、それではいけないのでせうか。

もしもかの忌むべき疑ひが事實であるとしたならば、私達は當然別れなくてはならないのだらうか。斷じて子孫を作らないにも拘らず。

父は二度調べさせたと云ふ。そしてあの不良少年は同じ事を云つた。それは偶然の無意味な一致に過ぎないであらうか。必然な一致であつたのでせうか。(下略)

### 第三 信

——様。もう一度貴方に手紙を書く事をお許し下さい。一昨日彼女から又手紙が來ました。

「——様。妾は不安です。不安です。貴方のお家からのあゝ云ふ御申越しに對して妾の家ではどうしてきつぱりした態度に出ないのでせう。妾の家では安心して只善意に解釋してゐるのでせうか。別に後ろ暗い事もないので平氣でゐるのでせうか。それともその反對に後ろ暗い事がある爲めにお



めおめ沈黙してゐるのでせうか。

——様。貴方は本當の事をお家からお聞きになつてゐると思ひます。貴方のお手紙は毎も乍らの愛と、誠と、熱とに充ちてゐます。妾は勇氣づけられます。けれども妾の氣のせゐか何處かに空隙があるやうな氣がするのです。貴方が強ひて書く事を避け、遠慮していらつしやる處があるやうな氣がするのです。何だか前のやうに隅の隅迄びつたりと貴方のお手紙は妾の全身を抱きすくめてはくれません。何處か足りない處があります。妾はそれがいやです。不安です。怖ろしいのです。お、それは何でもないと被仰つて下さい。貴方はまさか妾に、今となつてもう何もお隠しになる筈はありません。妾達の間には微塵の祕密もあつてはならないのです。少くとも妾にはそれでは我場が出来ません。——様。之は妾の氣の故でせうか、

妾にはあの悪戯つ子の手紙が氣になります。まさか。とは思ひます。あんまりです。あんまりひどい呪ひです。妾達が妾の親も兄妹も皆がそんな呪はれた者であらうとは！

妾はたまりません。あゝもしもそれが本當なら、妾はどうしたらよいのでせう。妾は戀しい／＼貴方と、妾の生命と別れなければならぬのでせうか。妾はもう貴方と云ふ太陽の光も見事出来ず、永久に、此世にゐ乍ら此世にゐず、地獄に隠れて亡者のやうに暮さなくてはならないので

せうか。おゝ、貴方から別れる位なら妾は死んで了ひます！

——様。許して下さい。こんな馬鹿な氣違ひじみた事を書いて。

之はみんな嘘です。氣違ひじみた妄想です。おゝこの妄想に呪ひあれ！

——様。貴方のお家で妾の血統を疑つていらつしやる事は本當でせうか。それならどうぞ、妾の血液を取つて調べて見て下さい。又妾の父や、兄妹の血液を。あらゆる親戚の血液を。ちつとも關ひはしません。妾はみんなに頼んでそれをさせます。

そんな事をして何にもならないでせうか。たとへ現在の妾の肉親の者の凡ての血が清い事が分つても未で足りないでせうか。妾達の子孫にはそれが現はれて来るかも知れない。と云ふのでせうか。それなら妾はどうしたらよいのです。日本一の名醫を頼んで妾の一家の者の診断書を作つて貰つて、それを差し出したら。それでも未だ足りないと云ふのでせうか。

妾は丈夫です。子供の時一度チブスをやつた位のもです。學校のお醫者様は妾の體格検査をする度に笑つて立派な體だと云つてくれました。

妾は何にもならない馬鹿な事を書いてゐるのでせうか。妾一個の健康は妾の血統を證明するのに何の役にも立たないのでせうか。



どんなに冷静な頭になつて詳しく昔の記憶を呼び醒しても妾には何にもそんな忌はしい追憶に接する事は出来ないのです。

——様。妾は今少し落ちついてゐます。そして珍しく冷静な氣持ちになつてこんな事も考へます。もしもその事が本當であるなら、つまり、妾や、妾の兩親や、兄妹が健全であるとしても妾の長い血統に、昔、さう云ふ血があつた事が事實であるならば、妾は諦めなくてはならない。此世に住む人間の義務として、大きく云へば人類と云ふものゝ持つ不幸、病氣を少しでも少なくし、早く此地上からそれを根絶せしめて了ふ爲めに妾は無理にも自分一個の苦しい情に打ち克たなければならぬ。それが人類の一員としての義務であるから。と。大きなえら相な事を云ふと思つて人は笑ふでせうが、妾は眞剣です。死に物狂ひで、本氣に考へます。坊さんの云ふ煩惱の捨置と云ふやうな六ヶしい言葉もぼんやり考へられます。そしてさうすべきではないかと思ひます。

もしそれが本當なら、併し何故妾はもつと早く其事を知らずにゐたのでせう。さうしたら妾は貴方などにお目にかゝつて、こんな風に迄なるやうな事はなかつたでせうに。貴方にお目にかゝつて、そしてその爲めにそんな事を知すやうになつたとは何と云ふ残酷な事です。

勿論それはみんな「もしもそれが本當ならば」と云ふ假定の上の事です。

そしてこんな事も考へます。もし妾がさう云ふ不幸な運命の母親であつたならば矢つ張り自分の娘を健全な方へ娶せる事を妾は遠慮するであらうと。そんな時には随分苦しむでせうが。そして妾達は人里を離れ、山の奥に寂しく、佛法にでも歸依して出来る丈け完全なきよい生活を送るであらう。と。

——様。妾は苦しむでゐます。しかししつかりしてゐます。妾は今書いたやうな事を決して未だ信じてゐるではありません。只自分にいざと云ふ時の覺悟をつける爲めにわざと書くのです。

思ひきつて父に一切を訊いて見ませうか。併しそれは怖ろしい事です。或は父にとつても。こんな時に母がゐてくれたら。併し母は早く亡くなつて了つて——母は妾が十二の時腎臓炎で亡くなりました。こんな怖ろしい場合に居合はせなかつたのが却つて仕合せだつたのでせうか。

妾は勿論叔母には訊いて見ました。叔母はそんな事は決してないと打ち消しました。本當云ふと、叔母は悪い人ではありませんが少し嘔吐きです。妾は叔母に慰められてゐます。しかし何だか叔母も少し此頃は此問題を避けてゐるやうで、頼りになりません。それも矢張り妾の氣の故かとも思ひますが。

妾は明日大阪に歸ります。暗い悲しい心を抱いて。何でもよい。早く貴方にお目にかゝりさへす



れば妾の心の病的な闇はすつかりきれいに拭はれて晴々として來るのです。云々。」

ああ、私達は今程光りを求めてゐる時はなかつた。日光を求めてゐる時はなかつた。

私は實に私達の運命の爲めに苦しみます。私は彼女をかくも苦しませる事になつて了つた。生きる爲め、生かす爲めの事が凡て其反對の結果となつて了つたのか。そして此苦しみは何處迄行くものか。前には只底知れぬ闇がある許りです。私は怖ろしい。——引返しやうのない事です。

私はもう自分の事を考へてはゐない。自分の幸福を問題にしてはゐない。私の事などどうでもよい。只彼女の事が氣になる。彼女はどうなるのか。——彼女として未だしもいゝ道を取つてくれる場合はかうです。即ち私から逃げる事です。私を不幸にすると云ふ事の神聖な辭退で私から永久に逃げ去ると云ふ事です。

私はそれを怖れる。それは未だしもいゝ方の場合ではあるけれども。矢つ張り私はそれを怖れる。否、私は矢張り自分の事を考へてゐるのです。どうして彼女を失ふ事を私が忍べませう。たとへ萬萬が一彼女の體の中の何處かの隅に如何なる妖魔が潜んでをれ、彼女の清さ、美、崇高、神聖に何の變りはない。そんな事は定つてゐる。

——だが私は未だ一方安心してゐる。凡ては悪魔にたくらまれた人間の間違ひであると。

併し、——様。まあ、喜んで下さい、私はふと、急に大阪に立ち、そして停車場で彼女を待ちうけて迎へる事の出来る時間が未だある事に気がつきました。そして直ぐそれを實行しました。

「何だか貴方が來ていらつしやるやうな氣が妾してましたの。」

可愛い、彼女は私に手を取られて車を降り乍らのぼせた顔をして云ひました。

おゝ、此輝かしくも小さいか弱い胸に私は心ならずもあのやうな怖るべき苦しみを醸したとは。そして此天から降り立つたやうな靈體の中に入りそめにもそのやうな醜怪な病素が棲くつてゐるなぞと疑はうとは。

それは下の關行きの汽車でした。突然その「下の關行ゆき」と云ふ札はふと私の腦裡に或る考へをひらめかしました。

「もう一度乗りませう。此汽車へ。」と私は云ひました。「何の事はない。此汽車へ乗つて了へばいいのだ。」私はかう口の中をつぶやきました。

「何處へ？」星のやうな眼を圓くして彼女は訊きました。

「何處でもいゝ。遠くへ行くのです。一緒に。」

「まあ、そんな事……」



「いゝんですよ！」私は嗚咽するやうに云ひました。「僕は金を持つてゐるんです。此處に待つていらつしやい！」

そして私は切符を買ひに走つて行つた。そして私はばつたり出逢ひました。彼女の叔母と、その娘達に。彼等は彼女を迎へに來たのです。

そして私の思ひつきはフイにされて了つた。

「宣しい。何れ近い中に。さうすれやいゝ。今度は本式に用意をして來て。」と私は腹を立て乍ら思ひました。丁度其時は私は二十圓許りしか持つゐなかつたのです。月謝に出す金を。

私は妨げられた。併し幸福であつた。

夜の八時頃彼女は私を停車場迄送つて來ました。そして道々話をしました。

「もし僕だつたら——」と私は云ひました。「もし僕が、實際にあの問題になつてゐるやうな不幸な運命に遭つたとしたら、僕はどうするか、貴女は知つてゐますか。」私は訊きました。

「かにかいやでも此話は二人の間でせずにはをけませんでした。」

「分りませんわ。でも、貴方なら……」

「もし僕が本當にさう云ふ血統の者だつたらどうします。貴女は」

「そんな事定まつてゐますわ。妾はなほ貴方と一緒になると云ひ度い位ですわ。貴方の不幸を少しでも少くする爲めに。妾の凡てを貴方の爲めに獻げて。だつてそれよりほかに妾の生きる道はないのですもの。」

「處が反對に不幸が大きくなる丈けだつたら。」

「それは子供でも出來ればね。でも……」

「僕だつて同じ事だ。」と私は強く云ひました。「僕は生きる權利を持つてゐる。僕らは生きる權利を持つてゐるんだ。」

「本當にね。併し貴方は悔んでいらしやるでしょ。妾のやうな者にぶつかつた事を。」

「本當に僕はくやんでゐる。或る點に。貴女のぶつかつた者が僕であつた爲めに僕の家で貴女の怖ろしい不安を突つつき出してさうな事になつた事を。他の家だつたら無事に行つたかも知れないのに。」

「そんな事はありませんわ。之は妾の運命なんですもの。何方にしたつてもしそれが事實なら、事實は隠れちやゐられませんわ。又隠れてゐてはならないのですわ。」

「僕だつたら、併し、自分がさう云ふ運命の者となつたら、矢つ張り大きな面をして、やるでせ



う。誰が山の奥へなんぞ引つ込んでやるもんですか。淋しくは暮すだらう。併し何で僕は悪人のやうに恥ぢ、くよくよと人と世を憚る事があらう。人間の恥づべき事は心の悪、不正、精神の悪病、自分の責任を自分で逃げる事他にはない。肉體上の事は、それを造つた自然や、運命自ら恥づべきなので、人間に何の責任もない事だ。運命や自然の恥を自分の恥として背負つて自分の一生を不幸に、惨めに棒に振る！そんな馬鹿々々しい事がどうして出来るものか。それも自分の體が實際に、その悪病の露骨な犠牲となつてゐる最悪の場合なら別です。いくら我ん張つても感じの上で人生は闇となつて了ふでせうから。しかし自分の血統に、遠い祖先に、事によつたらそんな病人がゐたかも知れないと云ふアテにもならぬ噂が立つた位で何をクヨクヨ憚る事がありませう。神以外の者を憚る！それは世間や、人間しか知らない大馬鹿者のすることだ！むしろ不埒な事だ！僕だつたら公々然と大きな面をして人生を濶歩し、自分の幸福を無遠慮に吸ひ取つて、勝手な仕事をし乍ら威張つて暮すでせう。下らない自然の犠牲になんぞにはなつてやらない。悪魔に凱歌を擧げさせてはやらない。僕の一生はもう少し大きい貴い意味があるんだ。永遠的なものに獻げてあるんだ。

「併し結婚は……」

「僕の爲めに甘んじて死ぬ事を幸福とする者とは結婚するでせう。子供は作らないかも知れない

が。」

「あゝ、しかし妾はどうしたらいいでせう。」

「何でもないさ。馬鹿な事は止めた。不愉快な事を強ひてして苦しむ必要はない。何もかも忘れて了ふのです。そして僕と一緒に遠くへ行つて住むのです。」

「遠くつて——何處へ？」

「世界は廣い。太陽は何處にでもある。その見られる處なら何處でもいい。」

「そんな事が出来て？」

「出来ますとも！僕は男だ。しかし貴女はいやなんですか。」

「貴方に捨てられたら妾は死ぬ丈けですわ。」

私達は燦爛たる星の下で思はず緊く抱き締め合ひ接吻しました。

——様。

私達は旅へ立ちます。永久の旅になるか、何處へ行くか、分りません。

二三日中に。

私は今希望と力に充ちてゐます。



彼女と共に。私達は何處で如何に生活するか。  
 それは何れ落ちついた先きからりお便します。  
 いろ／＼御心配を掛けて濟みません。何處へ行つても私は貴方を想つてゐます。それでは——ど  
 うか、貴方の上に御幸福がある事を——

——一九二〇年六月一三日——

大正拾年拾二月十五日印刷  
 大正拾年拾二月廿日發行

定價壹圓八拾錢

創  
作  
集

著  
者  
長  
與  
善  
郎

發  
行  
者  
東  
京  
市  
神  
田  
區  
表  
神  
保  
町  
三  
番  
地  
齊  
藤  
熊  
三  
郎

春  
の  
訪  
問



印  
刷  
所  
東  
京  
市  
牛  
込  
區  
改  
代  
町  
二  
十  
四  
番  
地  
太  
平  
社  
印  
刷  
者  
平  
山  
喜  
遊

發  
行  
所

東  
京  
市  
神  
田  
區  
表  
神  
保  
町  
三  
番  
地

藝  
術  
社

電  
話  
神  
田  
四  
四  
六  
八  
番  
振  
替  
東  
京  
五  
八  
一  
九  
七  
番



コ-217  
}

<p>ラエルハア エレンハア 高村光 太郎氏著</p>	<p>元千家氏著</p>	<p>オノレエド バルザック著 永島氏譯</p>
<p>詩譯 明 る い 時</p>	<p>詩集 新 生 の 悦 び</p>	<p>全譯 老 ゴ リ オ</p>
<p>戀愛を宗教とし崇高なる心の飛揚と絶叫したる白耳義の男性的詩人の幽玄にして且つ雄渾なる獨白の心境の音律なる韻を一言一句の音律に譯出したる名詩</p>	<p>敏感なる神経と豊饒なる天才的感情を以て世を凝視し夢想を得したる人地の愛を溢れしづる眞純な情に結晶せしめし珠玉の篇は頻出しめる詩集中の白眉</p>	<p>戀と虚榮の化身の如き娘に生涯の熱愛を蹂躙され乍らも肉身の愛を叫びつら食慾な寡婦を室に悲慘の生を直ちにする老人の物語は直ちに人生の縮圖であ</p>
<p>袖珍羽二重装 定價壹圓貳拾錢 送料六錢</p>	<p>袖珍羽二重装 定價壹圓貳拾錢 送料六錢</p>	<p>四六判美裝 五百三十頁餘 定價貳圓八拾錢 送料十二錢</p>
<p>發兌 東京市神田區三保町 藝 術 社 東京市神田區三保町 社 東京市神田區三保町 社 東京市神田區三保町</p>		



501  
255



終